

## 言語発達遅滞児におけるコミュニケーション能力について(Ⅱ)

— event focus approach を中心においたコミュニケーションの検討 —

高橋 泰子

(武庫川女子大学教育学科初等教育専攻)

### A Study of Communication Ability in Speech and Language Disability Children (I)

— An examination of communication in event focus approach —

Yasuko Takahashi

Primary Education Major,

Department of Education, School of Letters,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

The last time (Takahashi, 1994) and this time of study are that interaction process analysis between speech and language disability children and their mother and therapist. It guide to the following considerations.

Adult must read and make the meaning that communicational volition of verbal and nonverbal performance by child, for interaction is come into existence between child and adult. Children are the early stage of verbal aquisition who get to communication the aspect of action, and the communcation indication the function of communication is better than the verbal communication. The Wetherby's assessment is effective for autistic children.

And this study guide that if children have not mean their actions, that is made to mean by adult. So children act next time, they see the same action but that is not same mean, they have an intention action. Adults must be highly sensitive for children are that act intention of rare.

### 問 題

言語発達研究の動向は、1970年代に入って Chomsky(1965)の生成文法理論の影響を受けた統語(syntax)の研究から、それ以外に意味や機能を扱う研究が急速に進められた(Bate, 1976; Nelson, 1973など)。それとともに山田(1980)は以下の3つの変化が生じていると指摘している。「第1に、幼児期以降中心の研究から初期の言語獲得期の子供の研究へと対象年齢低下が生じた。……第2に、言語発達の基礎として音声中心に扱う傾向から非音声的行動をも重視する傾向への変化が生じた。……第3に、言語構造を生得的とみなすのではなく、その獲得過程に関心がもたれている……」。山田が指摘するように、第1の変化は、言語発達研究のみならず発達研究全般に言えることで、対象年齢の低下と関連しているであろう。第2の変化は、Piaget理論の広範で、認知構造が言語の基礎をなすという考えが影響し、母子相互作用の研究においても言語のコミュニケーションの基礎に焦点を当てはじめ、さらに non-verbal(表情や身振りなど)への関心が高まった影響と考えられる。日本においても Piaget(1936)の著した理論が、谷村ら(1978)によって翻訳されることにより広範し、言語発達研究が急速に変化したと言えよう。第3の変化は、「発達研究全般における発生的方法の重視と因果的説明への関心や乳児の能動性の協調と関連を持つ」と山田が同時に述べていることが言えよう。

このような言語発達研究の変化によって、語用論(pragmatics)が自然発生的に出現し、言語能力は社会的、背

景的環境の中で出現して、言語活動が営まれる様子そのものを研究するようになった。Halliday(1975)やDore(1975)らも、この語用論の観点から乳幼児期の言語発達を、どのような文脈や場面でどのような語を使用するか、それが言語獲得前の原言語(proto-language)と呼ばれる音声であっても、それらを調べることで乳幼児の伝達意図を把握しようとした。

このような研究から端を発した語用論は、臨床研究でもこの観点からの評価や治療方法が用いられ、近年において田中(1989)は、相互作用のアプローチと event focus approach の2つの流れがあると考えている。しかし、この2つのアプローチを別々の観点として分析されたものはいくつか見られるが、2つの観点から1つの対象を分析をしたものは数少ない。そこで、今後の言語発達研究のひとつとして、日常における母子相互作用がいかにして発展していき、また発展させて行くための大人のアプローチはどのようにしてくべきかを分析・研究することにより、臨床的なニーズにつながると考えられる。

## 目 的

Nelson(1985)によれば、乳幼児は1歳前後にはすでに行為としてスクリプトを持っており、3歳を過ぎる頃にはかなり詳細で秩序だったスクリプトの言語化が可能であると報告されている。それを参考に就学前の言語発達遅滞児と大人との相互作用過程を言語行動の語用論的機能に着目し、相互作用の役割交替、大人の働きかけの効果(相互作用のアプローチ)と、フォーマット、スクリプト(event focus approach)を分析することによって子どものコミュニケーション能力の発達及びその周辺領域の発達の諸側面との関連を検討する。

なお、本論文では event focus approach を中心に報告する。相互作用のアプローチを中心に分析・研究したものは、既に報告済みであるので(高橋, 1994)、それを参考にされた。

また、本研究では言語発達遅滞児とはコミュニケーションの手段に使用する言語に発達の遅れが見られるものと考え、精神発達遅滞児と自閉症児を、大人は母親とセラピストを分析対象とし、その違いを比較検討する。

## 方 法

### 1. 対象児及び対象者

対象児は自閉症児1名を含む精神発達遅滞児3名、対象者はその母親及びセラピストである。以下に対象児の生育の状態の概要を記す。

#### N児(男児：精神発達遅滞児)

周産期には特に異常はなく満期正常分娩。生下時体重2560g 始歩1歳3か月 生後1年までの発達は正常。始語は1歳6か月から2歳の間に「アーチャン」「パパ」等があった。聴力も脳波も異常は認められないが、保健所の3歳児健診で言語発達遅滞と言われる。

Table 1. Tsumori and Inage development assessment for children

	CA	運動	探索・操作	社会	生活習慣	理解・言語
N児	5:0	5:0	3:0	3:0	4:6	1:9
S児	5:10	3:6	2:6	2:6	2:0	3:0
R児	2:10	3:0	2:0	0:11	1:9	0:11

#### S児(男児：精神発達遅滞児)

周産期には特に異常はなく満期正常分娩。生下時体重2880g 始歩1歳6か月 始語2歳6か月 ことばの遅れに一番初めに気づいたのは祖父であり、初回の相談に訪れたのも祖父であった。本児は第一子であり、周囲の大人から非常にかわいがられて生育しており、保育所では自分で食事を取ることができるにも関わらず、家庭では母親もしくは父親が食べ物を口に運んでやるといったことが初回面接時ではあった。母親が何でも先回りして子どもの世話をやいているという傾向が見られた。

#### R児(男児：自閉症児)

周産期には特に異常はなく満期正常分娩。生下時体重3040g 始歩1歳2か月 乳幼児期より人への関心は薄くおとなしかったが、母親に抱かれると視線が合いよく笑った。10か月ごろより母親の働きかけに対してあまり反応を示さなくなる。1歳過ぎに喃語が現れ、1歳3か月ごろ「マンマ」「ブーブー」を言うようになるが、それらのことばが2歳頃から消失し、その後「ネンネ」(寝る)、「ダイダイ」(要求するとき)、「イヤー」の発語が不明瞭

ではあるが出現している。物に関して、水、砂、整然と並んだ数字やアルファベット、キャストに執着しやすい。

## 2. 手続き

### (1) 観察の方法

#### ① 観察期間

期間は6カ月間、1週間に1回ないしは2週間に1回観察した。初回観察を除いて初めの月から2カ月目を第Ⅰ期、3カ月目から4カ月目を第Ⅱ期、5カ月目から6カ月目を第Ⅲ期とする。

#### ② 観察場所・場面設定

プレイルームにおいて、対象児は用意されている玩具は自由に使って遊ぶことができる。また、母親には、対象児が用意した玩具に興味を示さない場合は対象児の自由に任せてよいことと、できるだけ禁止をすることのないようにした自由遊びをしてよいということを前もって説明しておく。なお、母親にはセラピー後必要に応じて対象児との相互作用が促せるように指導する。

#### ③ 観察手続き

1セッション対象児と母親が30分、もう1セッションを対象児とセラピストが30分ずつ関わり、1日2セッション60分行う。それをVTRで録画する。

なお、対象児に母親が前半関わったセッションの次の日のセッションは、前半をセラピストが、後半を母親というように、関わる対象者の順番を交替した。

### (2) 分析方法

VTRで録画されたものは、対象児と対象者の相互作用を分析するためにセラピー開始10分後から50の伝達行為のトランスクリプトを作成する。そして、さらに両者の関係を明確にするために、これをもとに以下の分析を行う。

① 対象児と対象者の相互作用はどのように進行しているのかを明らかにするために、文脈的に連続する50の伝達行為を実線もしくは破線で結び、他者にインパクトがあったか否かを矢印を付けて示し、トランスクリプトを作成する。1つの伝達行為は、対象児もしくは対象者が他者や物との相互作用を開始したときに始まり、対象児もしくは対象者の注意の焦点が移行し、あるいは順番が交替したときに終了する動作・発声・発語であるとする。各伝達行為は独立して記述され、合わせてその伝達行為の先行事象と後述事象も記述する。

なお、対象児の発声・発語が誤音であれば修正して再生表記をする。

② 構造化されるフォーマット(format)の変容を見るために、turn-takingの連続度から相互作用の状態を調べる。また、スクリプトの行動描写をし、構造を検討する。

## 結 果

Table 2が示すように、N児と母親との相互作用数はⅠ～Ⅲ期とあまり変化はなく、また、turn-takingの連続度(Fig. 1)も大きな変化はない。

N児とセラピストとの相互作用数はⅡ期に落ち込みはあるものの、Ⅰ期に比べると(Fig. 2)Ⅲ期は増加している。また、turn-takingの連続度もⅠ・Ⅱ期に比べⅢ期では連続度が高くなり、最も長いturn-takingは17にも及んだ。そして、turn-takingが1で終了する、すなわちN児が意図的伝達をし、セラピストが

**Table 2.** The counts of interaction in children and adults.

	N児		S児		R児	
	母親	セラピスト	母親	セラピスト	母親	セラピスト
Ⅰ期	86	70	41	59	20	12
Ⅱ期	76	59	31	63	15	38
Ⅲ期	85	97	45	83	18	24

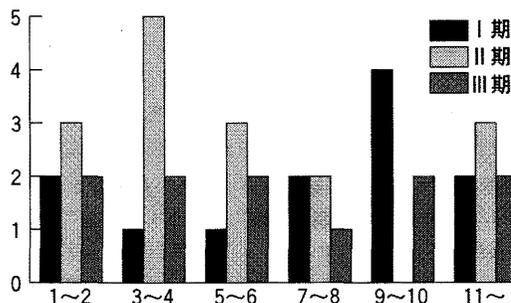


Fig. 1. The continuation frequency of turn-taking in N-child and his mother.

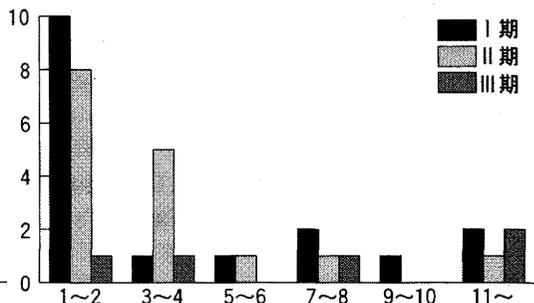


Fig. 2. The continuation frequency of turn-taking in N-child and therapist.

それを受け止めはするが続いて意図的の伝達はしない、ということが1回あったのみで、ほとんど無くなっている。

さらに turn-taking の質的な変化は、スクリプトで見られるものである。(Fig. 3~4)

N児と大人との間で行われるやり取りのトピックスは変化が見られ、I期では母親ともセラピストともを相手に相撲を取り、II期では母親とは段ボールに人が入りそれを動かす遊びと、高いところから飛び降りる遊びを、セラピストとは板の上に乗りグラグラ揺さぶりあいをしバランス遊びを、III期では母親とは桃太郎の劇遊びを、セラピストとは桃太郎の物語を絵に描きながら話をするのであった。

スクリプトを記述するにあたっては、Nelson(1985)のプレー・イベント(play event)を参考にした。プレー・イベントとは、ひとまとまりにすることが可能なイベントの発話(talk)と行為(action)を表現したものである。I期とIII期のセッションを記述した。その際に、行為者(子どもと大人)を区別していない。

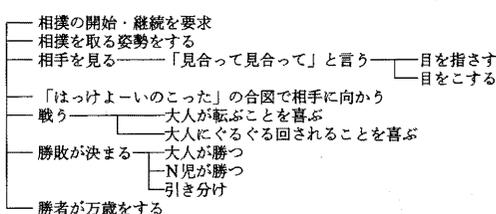


Fig. 3. "Sumoh wrestling" script of N-child with adults

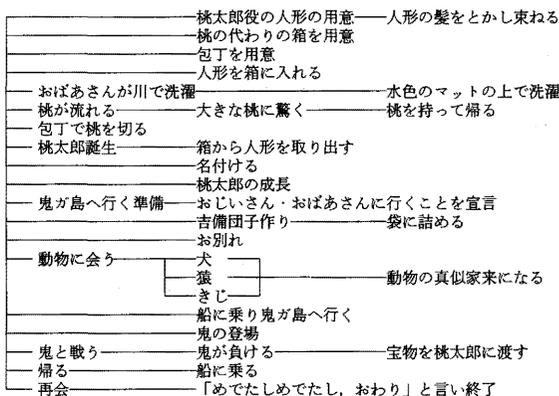


Fig. 4 "Momotaroh" script of N-child with adults

I期でのN児の相互作用は二者間の役割交替であったが、III期になると数人の役割を人形で見立てることと二者で交替しながら相互作用を進めており、スクリプトの質的变化を見ることができる。

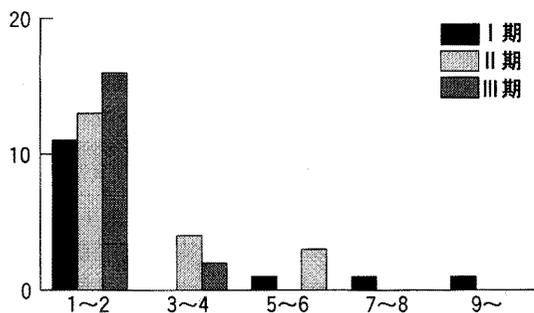


Fig. 5. The continuation frequency of turn-taking in S-child and his mother.

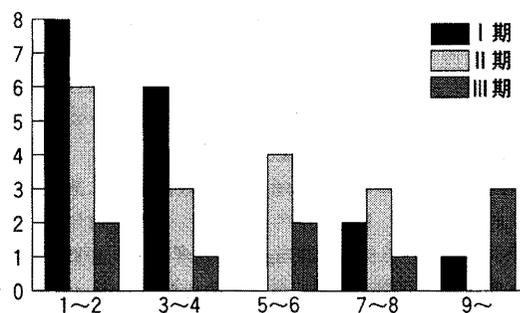


Fig. 6. The continuation frequency of turn-taking in S-child and therapist.

言語発達遅滞児におけるコミュニケーション能力について (II)

S 児においては、母親との相互作用数は I 期より III 期の方がやや増加しており turn-taking の連続度 (Fig. 5) が高くなる傾向がみられる。

S 児とセラピストの相互作用数は I 期から III 期にかけて徐々に増加しており、turn-taking の連続度 (Fig. 6) も高くなり、turn-taking の連続度の短いものは減少してきている。

S 児と大人の間で行われているゲームのトピックは I ~ III 期を通して共通しており、トラックの荷台に小さな物(ブロック、電池など)を載せ、違うもの(別のトラックやバケツなど)に移し替えるという遊びであった。S 児の遊びは感覚的な遊びが多く、小さな物を移し替えるときに起こる音を楽しんだり、車を走らせる際に砂が抵抗するのを楽しんだりしていた。しかし、I 期では日常生活の儀式・規則化された短いフォーマット (Fig. 7) だったものが、III 期ではその場面で起こった出来事を大人とやり取りを楽しむフォーマット (Fig. 8) へと変化し、適応範囲が広がっている。

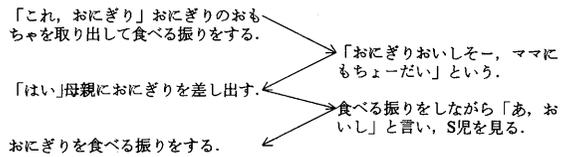


Fig. 7. Format of S-child with Adult at I stage

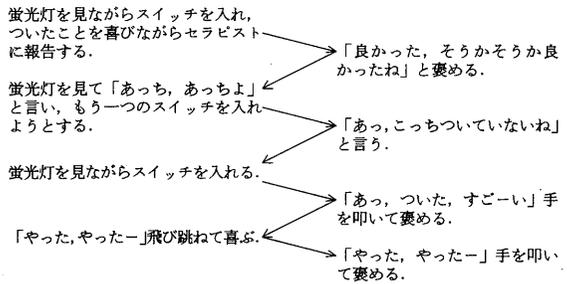


Fig. 8. Format of S-child with Adult at III stage

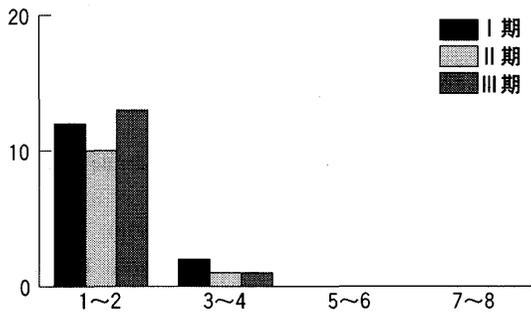


Fig. 9. The continuation frequency of turn-taking in R-child and his mother.

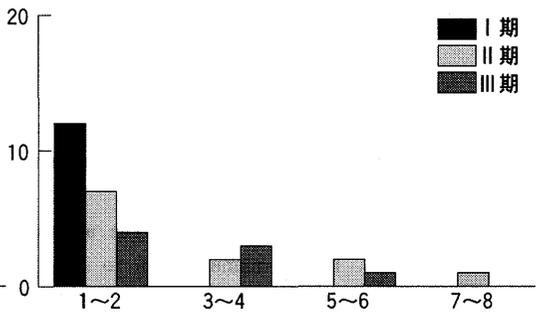


Fig. 10. The continuation frequency of turn-taking in R-child and therapist.

R 児と母親の相互作用数は I ~ III 期とあまり変化はなく、また、turn-taking の連続度も大きな変化はなかった (Fig. 9)。R 児とセラピストとの相互作用数は I 期に比べ III 期の方が増加している。また、turn-taking の連続度 (Fig. 10) も I 期に比べ II・III 期の方が高くなっている。しかし、それでも R 児と大人の相互作用は一方が意図的伝達をして受け止めはするものの、意図のある伝達は返さないといったものの割合が相互作用数からみて多くを占めている。

R 児の遊びは大人を介することが少なく、感覚的な遊びやいかなる物や人にも集中せず発声したり、走り出したりするというものである。R 児と大人の相互作用をフォーマット (Fig. 11) で見たところ、S 児のようなフォーマットの内容ではない。はじめの「足をバタバタ動かす」は無焦点の機能であり、何かを要求しているわけではない。しかし、2 回目以降の「足をバタバタ動かす」は大人に行動を起こさせる要求である (行為の要求機能)。はじめに起こした行為に大人が意味付けをし反応されたことが快の状態であったので、それをもう一度大人から引き出すために起こした行為が 2 回目である。この伝達行為は非常に希薄で読み取り損ねてしまう恐れがあるが、こ

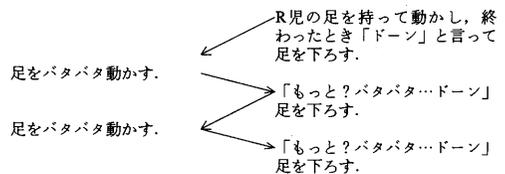


Fig. 11. Format of R-child with Adult

のように意味付けをして、サインを表出すると他者と相互作用を成立させることが出来るということを知らせることから、徐々に社会的にも認められるようなサインに変化するよう導いて行くことが必要となってくる。

## 考 察

N児・S児・R児ともにⅠ期からⅢ期にかけて差はあるもののturn-takingの連続度が延びており、連続度が高いものが相互作用を占める割合を高くしている。この要因は、前回高橋(1994)が、①子どもと大人の相互作用を成立させるためには、お互いが子どもの行為から伝達意図を読み取り、そして、意味付けをすることによって相互作用を成立させる手がかりを作っていくのである。そのような積み重ねから子どもは伝達手段を獲得していき、相互作用がより成立しやすい状態となっていく。②言語獲得の初期段階では、動作での意図の伝達は重要な役割を担っており、音声言語より高次な表示をすることも珍しくない。また、大人もそのような時期の子どもに対しては音声のみで相互作用しようとするのではなく、動作とも併用した伝達行為の方が有効である。③Wetherbyらの伝達機能の評価で大人の伝達機能を分析したところ、相互作用を促すために有効なことは、環境的相互作用的行為(物理的必要な反応)を最小限に控えること、と考察したことが考えられる。

さらに今回の研究において、子どもの行為には意図的な伝達がなくてもそれを意味づけることにより、同じ行為でも意図的伝達へと変化していくことが確認された。そのためにもR児のような伝達行為の希薄な子どもに対応するには、大人のセンシティブティを高めることが望まれる。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、終始温かくご指導下さいました兵庫教育大学教授松本治雄先生に心から感謝の意を表します。また、資料収集にご協力下さった3組の子どもと保護者の方々に厚くお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) Austin, J. L. How to do things with words. Word, 12, 260-279(1962)
- 2) Bates, E. The emergence of symbols: cognition and communication in infancy. Academic Press. (1972)
- 3) Bates, E. Language and context; The acquisition of pragmatics. Academic Press. (1976)
- 4) Bruner, J. S. From communication to language: A psychological perspective. in Markova, I. (Ed.) The social of language. (1978)
- 5) Bruner, J. S. Learning how to do things with words. : In J. Bruner and A. Garton (Eds.), Human growth and development: Wolf College Lectures, Clarendon Press. (1978)
- 6) Chomsky Aspects of the theory syntax, M. I. P. Press(1965)[安井 稔訳 文法理論の諸相 研究社(1970)]
- 7) Dore, J. Holophrases. speech, acts and language universals. Journal of Child Language. 2, 21-40(1975)
- 8) Halliday, M. A. K. Learning how to mean: Explration in the development of language. Arnold. (1975)
- 9) Nelson, K. Structure and strategy in learning to talk. Monographs of the Society for Research in Child Development, 149(1973)
- 10) 荻野美佐子 言語行動の発達(Ⅵ)-子どもの指さし行動の発達と母親の応答行動(9から30カ月の疑似縦断資料分析)-東京大学教育学部紀要 23, 127-140(1983)
- 11) Piaget, J. La naissance de l'intelligence chez l'enfant. Delachaux et Niestle. (1936) [谷村寛・浜田寿美男訳 知能の誕生 ミネルヴァ書房(1978)]
- 12) Prutting, C. A. and Kirchner, D. M. A clinical appraisal of the pragmatic aspect of language. J. Speech Hear. Disor. 52, 105-119(1988)
- 13) 佐竹真次 木原利憲 小林重雄 自閉症における語用論的伝達機能の評価 日本特殊教育学会第25回大会

言語発達遅滞児におけるコミュニケーション能力について (II)

発表論文集 (1988)

- 14) 佐竹真次 木原利憲 小林重雄 自閉症における語用論的伝達機能の評価 日本特殊教育学会第26回大会  
発表論文集 (1989)
- 15) 佐竹真次 木原利憲 小林重雄 自閉症における語用論的伝達機能の評価 日本特殊教育学会第27回大会  
発表論文集 (1990)
- 16) 佐竹真次 小林重雄 自閉症における語用論的伝達機能の発達に関する研究 特殊教育学研究会 26, 1-9(1989)
- 17) Searle, J. Chomsky's revolution in linguistics. In C. Harman(Ed.), On Noam Chomsky, Anchor Book. (1974)
- 18) 高橋泰子 言語発達遅滞児におけるコミュニケーション能力について(I)-語用論的伝達機能の評価による検討- 武庫川女子大学紀要 42, 51-58(1994)
- 19) 竹田契一 語用論について INREAL 研究 3, 115-132(1992)
- 20) 田中裕美子 米国における言語発達研究の概観 INREAL 研究 2, 43-60(1989)
- 21) 土屋 俊 語用論から認知科学へ-言語学の新しい方向を探る 10月号 22-29(1991)
- 22) Wetherby, A. and Prutting, C. Profiles of communicative and cognitive-social abilities in autistic. J. Speech Hear. Res., 27, 364-377(1984)
- 23) 山田洋子 言語機能の基礎 心理学評論, 23, 163-182(1980)
- 24) 山田洋子 0~2歳における要求-拒否と自己の発達- 教育心理学研究, 30, 128-137(1982)